

仏縁に出遇う

南無阿弥陀仏の葬儀

真宗大谷派

光明寺

親鸞聖人に出遇うお寺

最後のひと言は何だろうか。  
人生を終えるに当たっての。

それは、ナム・アミダ・ブツ。  
南無阿弥陀仏。

ナム(南無)は、頭がさがること。

アミダ(阿弥陀)は、ア(無)・ミタ(量)。

量ることを超えた世界。私の思いは、はかる(量・計・図)ことばかり。

いや、量ることの中にしか日々生きざるをえない。

上・下、優・劣、損・得、生・死、…。

そして、この“いのち”そのものまでも。

「南無阿弥陀仏」はそんな私に、「阿弥陀に南無せよ」という促し。

「不安は、いのちそのものが確かなものを求めているうめき」であると。

量らざるをえない人生にあって、

自分の思い量れることに影がよぎると、

途端に安心はくずれ苦悩となる。

しかし、それは私の中に確かなものへの欲求があるからだ。

老い、病み、死し、そして愛しき人との離別。

その苦悩の現実と不安の中にある私たち。

その私が、その苦悩を抱えつつも、なおこの世に生を受け、

生きて往くことのできる確かな道。それが、南無阿弥陀仏の教え。

愛しき人との別れは、悲しみとともに知らされる、

量ることを超えた“いのち”の事実。

その事実の前に、静かに手を合わせ、頭がさがる。

「南無阿弥陀仏」の一言をもってこの“いのち”を終えていくことは、

人生における出来事その全てが、

この私の“いのち”の尊い事実であったことへの頷き。

そしてその頷きを、遺された私たちに与えてくださる大切な仏縁。

それが離別の涙とともに開かれる

「南無阿弥陀仏の葬儀」という場です。

「立派に生きてたでしょ？」と、

次会う時に言えるように。